

ルベルト・エリアスが述べたように「自己規制」を高めることで、礼節およびマナーは道徳性をも可能にするのである。だが、やはりそれらが強いルールが反道徳的であつてはならない。『人倫の形而上学』が構築を試みたのはこの点である。カントは同書で礼節（という嘘）と真実性の正負を天秤にかけ、また道徳的「徳」と礼節の「優美」の相互補完性の論証に専心したのである。

よく知られているように、カントにとつて真実性とは、その遵守が他者におよぼす一切の影響を斟酌しない絶対的かつ無条件の義務である。⁽⁶¹⁾ よつて自身の気持ちをごまかす「善きマナー」や「礼節」をそれ自体として偽りとみなすべきならば、こうしたごまかしが我われの道徳的義務といかにすれば折り合うのか理解にくるしむ。だが問題は、厳密な意味での倫理ではなく、むしろマナーや礼節を社会生活において適用する際に生じる「決疑論的問題」「カトリックの用語：教義を現実社会の問題においていかに適用すべきかを問う」」なのである。礼節がその定義からして我われが思うことと振る舞いによつて表現するものとを違わせるとしても、礼節は嘘そのものではない。形式主義的な単なる礼節であっても、真に誰かをだますことはできないだろうからだ。「たんなる礼節に基づく真実

(59) *Critique de la faculté de juger*, op. cit., § 83 [『判断力批判』下、一三〇ページ]。

(60) « L'idée d'une histoire universelle », 7^e proposition, in *Opusculs...*, op. cit., p. 82 [「世界市民という視点から見た普遍史の理念」、五四〜一〇〇]。

(61) とりわけ下記を参照。 *Doctrine de la vertu*, I, II^e partie, 2^e section, § 9 (*Œuvres philosophiques*, op. cit., t. III, 1986, p. 715-719) [『人倫の形而上学 第二部 徳論の形而上学的原理』I 第一部第二篇第九節「虚言について」宮村悠介訳、岩波文庫、二〇二四、一二四—一三〇ページ]。バンジャマン・コンスタンの批判への応答である以下も参照。« Sur un prétendu droit de mentir humanité » (*ibid.*, p. 433-441) [「人間愛から嘘をつく権利と称されるものについて」谷田信一訳、『カント全集 十三』、二五一—二六〇ページ]。